

関西理学療法学会 一日研修会 デイセミナー第1講

『下肢疾患・スポーツ疾患のトップダウン評価の実際』

伏見岡本病院リハビリテーション科

上村拓矢 飛田勇樹

三浦雄一郎 福島秀晃

下肢の運動器疾患患者の動作では、「関節・組織の状態」「手術方法」「炎症（関節内・外）」の影響を受けることが多い。また、臨床では痛みを主訴とした症例が多く、動作観察を何度も行いうることができない。そのため、事前の情報収集で全体像を把握して、観察すべき動作のポイントを捉えることが重要である。特にスポーツ傷害では、「走る」・「跳ぶ」などの基本的な動作が複数組み合わせたり、スピードも速いため動作分析を困難にさせることが多い。そこで、我々は動作分析の工夫として「F task」を雑誌関西理学療法 24 巻で紹介した。「F task」は、受傷機転や障害発生のメカニズムに配慮して、狭い空間でも運動特性を把握できる動作課題である。「F task」におけるトップダウン評価にて機能障害を整理することで、スポーツ疾患患者の動作分析が苦手な理学療法士でも対応しやすいと考える。

今回、スポーツ疾患における下肢の障害発生に着目し、「F task」によるトップダウン評価を用いて良好な成績が得られた症例を紹介する。また、実際のアプローチ方法についても併せて説明する。